Osaka Shoin Women's University Repository

『源氏物語』における「ゆかし」の考察（六）

北村英子

本稿は、前稿 ―『源氏物語』における「ゆかし」の考察（五）――（「樟蔭国文学」第二十九号）に引続き、「椎本」の巻から逐次用語例を検討していく。

これは「ゆかし」という語彙の持つ、語義・感覚・心理・好奇心・対象・用法等を追究しまとめることを目的にしたものである。

「椎本」の巻では、「ゆかし」という語は五個見当たる。それ等を示し検討していく。

。二月の二十日のほどに、兵部卿宮初瀬に詣でたまふ。古き御願なりけれど、思しも立たで年ごろになりにけるを、宇治のわたりの御中宿のゆかしさに、多くはもよほされたまへるなるべし。恨めしと言ふ人もありける里の名の、なべて睦ましう思さるる、ゆゑもはかなしや。上達部いとあまた仕うまつりたまふ。殿上人などはさらにもいはず、世に残る人少なう仕うまつれり。

一番目は、「ゆかしさ」と名詞で表われる。

語義は文脈に即して考察すると、「ゆかし」本来の意義から派生した、「楽しさ」と解すると、より適切な訳が付くように思われる。そして、「二月の二十日頃に、兵部卿宮は初瀬にお参りになる。以前からの御祈願ではあったが、お思い立ちにならぬまま何年にもなってしまったのを、宇治のあたりの御中宿りの楽しさに、主としてお出かけになるお気持ちになられたのであろう。……。」と現代語訳出来る。当時、初瀬詣で等をする人は、宇治のあたりで中宿りをすることが多かったようである。『花鳥餘情』にも「南都下向の人は宇治を中やとにす後々の御幸なとにも平等院にて御儲の事あるなり」とある。匂宮も、二月二十頃、初瀬詣での帰途、中宿りを宇治でなさりたいお気持ちになられる。匂宮が宇治に強く心惹かれた理由は、『眠江入楚』にも「兵部卿宮は(八)宮ノ姫君たちを聞をきてゆかしくおほすなるへしといへる也」とあるが、匂宮は薫に八宮の姫君の話を聞いて以来、異常な程好奇心を寄せている。この場

Osaka Shoin Women's University Repository

面は「橋姫」の巻にある。それを示すと、

例の、さまざまなる御物語聞こえかはしたまふついでに、宇治の宮の事語り出でて、見し暁のありさまなどくはしく聞こえたまふに、宮いと切にをかしと思いたり。さればよ、と御気色を見て、いとど御心動きぬべく言ひつづけたまふ。……（中略）……ほのかなりし月影の見劣りせずは、まほならんはや。けはひありさま、はた、さばかりならむをぞ、あらまほしきほどとおぼえはべるべき」など聞こえたまふ。

はてはては、まめだちていとねたく、おぼろけの人に心移るまじき人のかく深く思へるを、おろかならじとゆかしう思すこと限りなくなりたまひぬ。

とある。この辺りの場面の説明は、既に、前稿「『源氏物語』における「ゆかし」の考察（五）」（「樟蔭国文学」第二十九号）で述べたが、匂宮は、さぞ、八宮の姫君は、際立った美質の備わった女性であろうと想像し、見たい気持ちが募る。そして、とうとう「椎本」の巻で、二月二十日の頃、かねて薫から聞いていた、宇治八宮の姫君に実見出来るであろうという期待を持って、初瀬詣でに出向く気持ちになる。その折り中宿りする事を楽しみに思っているのは、まだ噂にしか聞いたことのない、素晴らしい女性が住む里に泊って、女性に「会ってみたい」そして、「話してみたい」という期待心からである。したがって、匂宮の「ゆかし」の志向対象は、「宇治のわたりの中宿」、即ち「宇治に住む八宮の姫君達」への好奇心である。このように考えると、匂宮という優越者的立場の男性の好奇心は、年下の女性に向けられており、うきうきとした落ち着かない陽性的心理を伴っているといえる。

次の用語例を検討する。

。薫「すべて、まことに、しか思ひたまへ棄てたるけにやはべらむ、みづからの事にては、いかにもいかにも深う思ひ知る方のはべらぬを、げにはかなきことなれど、声にめづる心こそ背きがたきことにはべりけれ。さかしう聖だつ迦葉も、さればや、起ちて舞ひはべりけむ」など聞こえて、飽かず一声聞きし御琴の音を切にゆかしがりたまへば、うとうとしからぬはじめにもとや思すらむ、御みづからあなたに入りたまひて、切にそそのかしきこえたまふ。

二番目は、「ゆかしがり」と動詞の連用形で表われる。

語義は諸書には多く、「所望なさる」と解されているが、「ゆかし」本来の意義から考えると、『源氏物語評釈』が示すように「聞きたがる」と解した方が、より適切であると思われる。この場合、薫は姫君のかきならす琴の音を聞くことを所望しているのである。したがって、「……、以前に残り惜しくも一声聞いた姫君の御琴の音を、しきりに聞きたがっていらっしゃるので、八の宮は薫と姫君方とがお近づきのきっかけにとでも思っていらっしゃるのであろうか、御自身姫君達のお部屋におはいりになって、しきりにおすすめ申しあげていらっしゃる。」と現代語訳出来る。この「飽かず一声聞きし御琴の音」とは「橋姫」の巻の次の叙述を指す。

近くなるほどに、その琴とも聞きわかれぬ物の音ども、いとす

Osaka Shoin Women's University Repository

ごげに聞こゆ。「常にかく遊びたまふと聞くを、ついでなくて、親王の御琴の音の名高きもえ聞かぬぞかし。よきをりなるべし」と思ひつつ入りたまへば、琵琶の声の響きなりけり。黄鐘調に調べて、世の常の掻き合はせなれど、所からにや耳馴れぬ心地して、掻きかへす撥の音も、ものきよげにおもしろし。箏の琴、あはれになまめいたる声して、絶え絶え聞こゆ。

この時の琴の音の、ころころとまろび出てくるような柔らかくなまめかしい響きを忘れることが出来ず、ゆかしがるのである。このように、音楽に耳を傾け、好奇心を強く抱く薫は、実父譲りの音楽を愛する血筋を受け継いでいるものと思われる。この音楽好きである薫は、聴覚が敏感に働き、美しい音色を聞きたいという美意識が常に心中に潜在している。

さて、本用語例中に見られる「ゆかしがる」は、未知のものではなく、すでに一度ちょっと体験した、惹きつけられるような美しい琴の音色を、再び体験したいと所望している。これは、庇護者的立場にある薫という男性が、庇護される立場にある、八宮の姫君の弾奏する美しい音色に向けられた好奇心である。薫の聴覚的欲求の心裡には、強い期待心と陽性的心理を伴っている。

次の用語例の検討に移る。

。世の常の懸想びてはあらず、心深う物語のどやかに聞こえつつものしたまへば、さるべき御答へなど聞こえたまふ。三の宮いとゆかしう思いたるものを、と心の中には思ひ出でつつ、わが心ながら、なほ人には異なりかし、さばかり、御心もて、ゆるいたまふことの、さしも急がれぬよ、

これは三番目で、「ゆかしう」と形容詞の連用形で表われる。

語義を文脈に即して考察すると、「会いたく」と解するのが最も適切であり、「この薫は、世の常の懸想人のようではなく、考え深くお話を物静かに申し上げながらいらっしゃるので、姫君も、それに応じた御返事などを申しあげていらっしゃる。匂宮がたいそうこの姫君に会いたくお思いであるのにと、心の中では思い出しながら、我ながらやはり他の男とは違っているなあ、……」と現代語訳出来る。この叙述は用語例の二番目から場面が展開してきているが、薫が八の宮の姫君に関心を寄せている様子から、匂宮もどんな美質の備わった女性であろうかと想像を逞しくし、「会いたい」そして「話したい」と思っていらっしゃるであろうと、薫は内心思っている。そもそも薫は、「橋姫」の巻で、八の宮の姫君達を月光のもとで垣間見た時の印象を、次のように話している。

ほのかなりし月影の見劣りせずは、まほならんはや。けはひありさま、はた、さばかりならむをぞ、あらまほしきほどとおぼえはべるべき」など聞こえたまふ。

この言葉は、匂宮の好奇心を煽り、

はてはては、まめだちていとねたく、おぼろけの人に心移るまじき人のかく深く思へるを、おろかならじとゆかしう思すこと限りなくなりたまひぬ。

と、匂宮の心はかえって姫君達に意識を強める。

さて、ここで考察している用語例の三番目は、右に示した「橋姫」

Osaka Shoin Women's University Repository

の巻の引用個所を受けている。匂宮は薫から姫君を見た印象を聞いて以来、「見たい」・「会いたい」そして「話したい」気持ちが募る一方であったであろうと、薫はひそかに思い出している。薫の心中であるが、匂宮の姫君達に対する好奇心を察知することが出来る。それは、未知のことに対して、期待心を働かせていることになり、視覚的願望の心裡には、不安定な陽性心情を伴っているといえる。この好奇心を持つ主体者は、匂宮という優越者的立場にある男性で、弱者である女性、姫君に対して向けられた意識である。

次の用語例を見ていく。

。花盛りのころ、宮、かざしを思し出でて、そのをり見聞きたまひし君たちなども、「いとゆゑありし親王の御住まひを、また も見ずなりにしこと」など、おほかたのあはれを口々聞こゆるに、いとゆかしう思されけり。

四番目は、「ゆかしう」と形容詞の連用形で表われる。

語義は、『湖月抄』に「匂宮は姫君の事ゆかしうおぼす也」とある。したがって、匂宮は姫君を宇治詣で以来慕わしく思っており、「会いたい」そして「話したい」気持ちが募る。

『源氏物語評釈』には「行きたく」・『日本古典文学全集』には、「お逢いしたく」と解されているが、ここでは『古典全集』が示すよう「ゆかし」本来の意義、「会いたく」と解したい。そして、「花盛りの頃、匂宮は、昨年初瀬詣での帰りに、『かざし』の歌のやりとりをお思い出しになられて、その時、それを見聞きなさった君達なども、『たいそう趣のあった親王のお住まいを、二度と見ることもできなくなってしまいましたこと』など、世の常のはかなさを口々に申し上げるので、宮はたいそう姫君にお会いしたくお思いになるのであった。」と現代語訳することが出来る。この場面は、用語例一の「椎本」の冒頭部分をうけており、この一年前の二月二十日頃の花ざかりの季節にした宇治詣で以来、八宮の姫君達のことを匂宮はゆかしく思っている。

さて、このように検討してみると、本用語例中の「ゆかし」は、匂宮という優越者的立場の男性が、弱者的立場にある姫君という女性に向けられた好奇心である。この匂宮の好奇心は、好色心を働かせ、「会いたい」という視覚的欲求の心裡には、話をして接触したいという意識が潜在しているものと思われる。一年前に宇治詣でをしてから、この欲求はますます強まる一方で、落ち着かない陽性心情を伴っている。

次の用語例を検討していく。

。大殿の六の君を思し入れぬこと、なま恨めしげに大臣も思したりけり。されど、匂宮「ゆかしげなき仲らひなる中にも、大臣のことごとしくわづらはしくて、何ごとの紛れをも見とがめられんがむつかしき」と、下にはのたまひて、すまひたまふ。

この用語例は、「椎本」の巻の最後で、五番目に当たり、「ゆかしげなき」と形容詞の連体形で、否定の形で表われる。

語義を考察すると、『湖月抄』に「六の君は匂宮の御母かたにつきて、いとこにてましませば也」とある。六の君と匂宮の二人は、近親の間柄なので、すでに性格や人柄等は聞いて知っている。これ

Osaka Shoin Women's University Repository

から「ゆかしげなき」は、「魅力のなさそうな」と解するのが最も適切のように思われる。そして、「大殿の六の君を、宮は気に留めていらっしゃらないので、いささか恨めしそうに大臣も思っていらっしゃるのであった。けれども宮は、『魅力のなさそうな縁であり、大臣が大層うるさくて、どんなちょっとしたことでもおとがめをうけそうなのが厄介なのだ』と、内々にはおっしゃって、聞き入れまいとしていらっしゃる」と現代語訳出来る。

さて、このように検討吟味してくると、「珍しくないもの」・「知りつくしたもの」に対して、「ゆかしげなし」と示しているのははなはだ興味がある。肯定的に考えるならば、「珍しいもの」・「新鮮なもの」・「未知なもの」に対して関心を惹くことが「ゆかし」の基本的な用法であると言える。それには、落ち着かない期待心を伴うことになる。

この用語例五の「ゆかしげなし」の主体者は匂宮で、庇護者的立場にある男性と、庇護されるべき立場にある六の君という女性の間柄に対して用いられており、この二人はすでに知りつくした間柄であるから未知の期待心や好奇心はなく、主体者である匂宮の不服心を察知することが出来る。殊に匂宮の言葉の最初に「ゆかしげなき……」と言い切っているのは、強い陰性心情を示しているものと思われる。

以上「椎本」の巻の五例を検討吟味してきた結果、「ゆかしさ」という名詞形・「ゆかしがる」という動詞形・「ゆかしう」という形容詞形・「ゆかしげなき」と形容詞の否定形とさまざまの語形で表われている。

語義は用語例一においては、「ゆかし」本来の意義から派生して、珍しく「楽しさ」という意味が見られ、用語例二においては「聞きたがる」、用語例三・四においては両方共「会いたい」と解され、「ゆかし」の本義で表われ、用語例五においては、言葉の発語に「魅力のなさそうな」と派生的な語義で見られ、それぞれ、さまざまな意味で用いられている。

次に「ゆかし」と意識している主体者と対象をまとめる。用語例一は匂宮の心情で、「宇治のあたりの中宿りをすること」に好奇心が向けられている。それは八宮の姫君が住んでいる所を意識して、姫君に対する好色心から思いは宇治に向けられている。用語例二は、薫が姫の弾奏する琴の音を聞きたがっている。薫の好色心と美しい音色にすい寄せられる聴覚的美意識が察知出来る。用語例三は薫の心中であるが、匂宮は八宮の姫君に好色心を示しているため、「会いたい」と視覚的欲求を働かせている。用語例四も、匂宮の好色心から八宮の姫君に視覚的欲求を働かせている。用語例五は、匂宮の言葉の発語に、六の君に対して「ゆかしげなき」と拒否的な態度を示している。

さて、このように検討してくると、「椎本」の「ゆかし」の特色は、優越者的立場・庇護者的立場にある男性が、弱者・庇護下にある女性に向けられた好奇心で、それは用語例五以外は、好色心・期待心等の陽性的心理の昂揚を伴うものであるといえよう。用語例五においては、珍しく否定形で表われる関係上、匂宮という優越者的

Osaka Shoin Women's University Repository

立場の男性が弱者である女性に向けられた陰性的心理である。これを肯定的に考察すれば、先に指摘した如く、「新鮮なもの」・「未知なもの」に対して、基本的には使われるものと考えられる。

次の巻は「総角」の巻である。この巻には「ゆかし」の用語は四個所にわたって表われる。それを逐次検討していく。

。弁参りて、「いとあやしく、中の宮はいづくにかおはしますらむ」と言ふを、いと恥づかしく思ひかけぬ御心地に、いかなりけん事にか、と思ひ臥したまへり。昨日のたまひしことを思し出でて、姫君をつらしと思ひきこえたまふ。明けにける光につきてぞ、壁の中のきりぎりす這ひ出でたまへる。思すらむことのいといとほしければ、かたみにものも言はれたまはず。「ゆかしげなく、心憂くもあるかな。今より後も心ゆるいすべくもあらぬ世にこそ」と思ひ乱れたまへり。

この一番目の用語例中には、「ゆかしげなく」と形容詞の連用形で、否定の形で表われる。

語義を考察すると、諸書にはさまざまの訳を見る。『源氏物語評釈』には、「ゆかしさもなくし」とあり、『日本古典文学全集』には、「あらわに見られてしまった」とあり、『新潮日本古典集成』には、「(妹の姿まですっかりみられてしまって)奥ゆかしげもなく」とそれぞれ訳されているが、今回ここでは逐語訳的に考えて、現代語の「ゆかしい」の意味、即ち、『新潮日本古典集成』が示すように、「奥ゆかしげもなく」と解しておきたい。そして、「……、中の君がどう思っていらっしゃるかと、大君は中の君が大層気の毒なので、お互いに物も言えないでいらっしゃる。『(中の君だけは薫にも見せずにしておこうと思っていたのに、すっかり見られてしまって)奥ゆかしげもなく、情けないことになったものよ、これから後も、気をゆるしてはならないものだ』と思い悩んでいらっしゃった。」と現代語訳しておこう。また、『湖月抄』を見ると、「姫君の心也。隨分中君をばゆかしげにしなさんとおもふに、かやうなるは口をしと也。」とある。このように、大君は、(妹の姿まですっかり)薫に見られてしまったので、ゆかしさがなくなってしまったことを残念に思っている。これを肯定的に考えるなら、「未知のもの」・「未経験なもの」に対して、「ゆかし」は使われるといえる。そして、薫から姫に向けられた意識ということは、換言すれば、庇護者的立場にある男性が、庇護下にある女性に向けられた視覚的意識といえよう。が、これは大君が中君を思う心中に表われる。

次の用語例の検討に移る。

。こなたかなたゆかしげなき御ことを、恥づかしくいとど見たまひて、御返りもいかがは聞こえん、と思しわづらふほど、御使、かたへは、逃げ隠れにけり。あやしき下人をひかへてぞ御返り賜ふ。

大君へだてなき心ばかりは通ふともなれし袖とはかけじとぞ思ふ

心あわたたしく思ひ乱れたまへるなごりにいとどなほなほしきを、思しけるままと待ち見たまふ人は、ただあはれにぞ思ひなされたまふ。

Osaka Shoin Women's University Repository

二番目の用語例には、「ゆかしげなき」と形容詞の連体形で、否定の形で表われる。

語義は文脈に即して考え、「奥ゆかしそうもない」と解し、「大君は、自分も中君も、かつて薫に見られた、奥ゆかしそうもない御事を、恥ずかしく一層御覧になって、御返事も何と申し上げよう、と思い悩んでいらっしゃるうちに、お使いの何人かは逃げて姿を隠してしまった。卑しい下人を引き止めて御返事をお渡しになる。……。」と現代語訳出来よう。これは、用語例の一番目に関連し、薫という男性に姉妹共に姿を顕に見られてしまっていることを、「ゆかしげなき御こと」という言葉で表わしているのは、「ゆかし」の用法究明への一つの手掛りとなり得ると思われる。

当時、女性が男性に顔を見られることを、恥ずべきこととし、通常、女性は男性にやたらに顔を見せない。が、しかし、この場面においては、姉妹二人共、薫に顕に顔を見られてしまっている。これを「ゆかしげなし」と示している。換言すれば、「ゆかし」は、露骨に見える物には基本的には使わない。「見えないもの」・「未経験なもの」・「未知のもの」に対して、憧憬し心惹かれる思いを指すのが特徴である。そして、本用語例においても、庇護的立場にある優越者としての男性が、庇護下にある女性を顕に実見したことに対して、「ゆかしげなし」と否定の形で使用されている。

次の用語例の検討に移る。

。御簾(みす)かけかへ、ここかしこかき払ひ、岩隠れに積れる紅葉の朽(くち)葉すこしはるけ、遣水(やりみづ)の水草(みくさ)払はせなどぞしたまふ。よしあるくだもの、肴(さかな)など、さるべき人なども奉れたまへり。かつはゆかしげなけれど、いかがはせむ、これもさるべきにこそは、と思ひゆるして、心まうけしたまへり。

この三番目の用語例には、「ゆかしげなけれ」と、已然形で否定の形で表われるのは、珍しく全用語例中、ここ一個所のみである。

語義を考察すると、意訳的にはさまざまな解釈が考えられようが、ここで逐語訳的な解釈を試みると、その範囲はかなり狭められ、文脈からして、「ゆかし」を「奥ゆかしい」と解し、現代語の「ゆかしい」につながる意味にとると文意は通ずる。したがって、「ゆかしげなけれ（ど）」は、「奥ゆかしさはないけれども」と解し、「……。（こう何もかも薫に頼るのは）一方では、奥ゆかしさはないけれども、どうしよう、これも前世からの宿縁なのだろうと、大君はあきらめて、心積りをなされた。」と現代語訳出来る。これから考えられることは、何もかも積極的に露骨な態度で薫に頼るのは、「ゆかしげなけれ（ど）」と表わしている。特に大君というなまめかしい女性が薫という高貴な男性に接する態度としては、「ゆかしさ」がないことになる。これを換言すれば、態度や気持ちを積極的に露骨に表わした醜さには「ゆかしさ」はない。むしろ、態度や気持ちの醜さを包み隠し、はっきり顕に外に表わさないこと、また、消極的で慎ましやかな控え目な態度に対して「ゆかしさ」はある。特に高貴な女性の振舞いや態度はこういった「ゆかしき美」が備わっていよう。このように「ゆかし」の用法は是認される。ここで、本用語例の検討に戻るが、「ゆかしき美」が備わっているであろう大君の

Osaka Shoin Women's University Repository

思いなればこそ、「（こう何もかも薫に頼るのは）一方では、奥ゆかしさはないけれども、どうしょう、……。」と思案を覗かせている。大君にとって薫は後見人的立場にある。その相手に対して、何もかも世話を受けることを「ゆかしげなけれ（ど）」と心を混乱させている。大君の陰性的心理が察知出来る。また、この思案は未経験のことに対して、心を惑わせているといえる。

次の用語例を検討していく。

。風のいとはげしければ、蔀おろさせたまふに、四方の山の鏡と見ゆる汀の氷、月影にいとおもしろし。京の家の限りなくと磨くも、えかうはあらぬはや、とおぼゆ。わづかに生き出でてものしたまはましかば、もろともに聞こえまし、と思ひつづくるぞ、胸よりあまる心地する。

薫　恋ひわびて死ぬるくすりのゆかしきに雪の山にや跡を消なましし

半なる偈教へむ鬼もがな、ことつけて身も投げむ、と思すぞ、心きたなき聖心なりける。

これは四番目の用語例で、「総角」の巻の最後に当たり、「ゆかしき」と形容詞の連体形で歌の中に表われる。

この第三句の「ゆかしき（に）」の意義を、歌意から考察すると、あまり多様な解釈は成り立たず、「ゆかし」本来の意義の基盤のもとに、「欲しい（ので）」と解してほとんど問題はないであろう。歌意は「大君の恋しさに堪えかねて、死ぬ薬が欲しいので、雪の山にでも入って、姿を消してしまおうかしら」薫が眼前の雪山を見て、薬草が多いとされていた雪山（ヒマラヤ山）には、死ぬ薬もあるであろうから、それが欲しい気持ちを歌に託したものである。薫が身を投げたい程、恋に苦しんでいる様子が伺われるが、この歌の核心は「ゆかしきに」という強い欲求の部分にあると思われる。そもそも「ゆかし」という形容詞は、散文には豊富に見られ活発な活動を見せているにもかかわらず、歌中にはあまり例を見ない。恐らく歌語としては十分に適合せずじまいに終ってしまった傾向にあるのに、この「ゆかし」という形容詞語彙が、わざわざこの歌の中に感情の盛り上がりとして使用されているのは、よほど死ぬ薬を求めたいという欲求が強いものと思われる。また、この『源氏物語』には、全般的に形容詞が多用されている関係もあってか、あまり歌に用いられてない「ゆかし」という語彙が、この歌に用いられているのは、「ゆかし」という欲求の表白が、表現の中核となっており、この歌には、必要かつ適合した言葉であったものと考えられる。

さて、本用語例中の「ゆかし」の用法は、求めることが不可能な未知のものに対して、心が強く惹かれている。その心裡には、落ち着かない陰性心情が察知出来る。

以上、「総角」の巻の用語例を検討してきた結果、四例中三例が、「ゆかしげなく」・「ゆかしげなき」・「ゆかしげなけれ」と、「ゆかし＋げ＋なし」の三個の意義的単位を接合し一語的な語感で、否定表現をなしている。語義は先に考察してきたように、三例とも現代語の「ゆかしい」・「奥ゆかしい」につながる意味の、「奥ゆかしげもない」と解するのが文脈的意味として、最も適切のように思われる。

Osaka Shoin Women's University Repository

このように「総角」の巻においては、三例とも同じように否定表現で、同一的意味を用いているのは、その場その場の偶然性によるものであろうか、意識的と見るべきであろうか興味を示すところである。この長大な『源氏物語』も後半部になってくると、「ゆかし」本来の意義から派生した意義や用法が見られるようになってきているのは、時代の推移を感じさせるむきもある。

では、この三例の用法をまとめると、薫という庇護者的立場の男性に、庇護下にある女性である姫君達の顔を顕に見られてしまったこと、また、大君が薫に何もかも遠慮なく露骨な態度で薫に頼る醜さを、「ゆかしげなし」といっている。この否定表現を逆に肯定的に考えることが「ゆかし」の用法解決への一つの手掛りとなると思われる。それは結局、露骨に見える物や、何もかも積極的に露骨な態度や気持ちを表わした醜さには「ゆかしさ」はなく、「未知なこと」・「未経験なこと」を憧憬する気持ちや、露骨な態度や気持ちの醜さを包み隠し、消極的で慎ましやかな控え目な態度に対して、「ゆかし」は使われると言える。このようにこの辺りになってくると、「ゆかし」に「見たい」・「聞きたい」・「知りたい」等の感覚的欲求の他に、「奥ゆかしい」美的条件が包含されるようになってきたことが明らかに見られる。　以上、「総角」の巻の用語例㈠・㈡・㈢について、一括してまとめてきたが、もう一例、用語例㈣についてまとめをしておく。

歌の第三句目に「ゆかしき（に）」と用いられている意義については、先に示したが、「ゆかし」本来の意義素のもとに、「欲しい（ので）」と解し、未知の物を欲求しているが、得る事が不可能であると知りつつ強い願望でもって歌中にその気持ちを託している。この「ゆかし」という感情の盛り上がりの心裡には、不安定な陰性的な心情を伴っているといえよう。

このように考察を進めてくると、「ゆかし」という欲求には、多く不安定な心の動揺を伴うことが知れてきた。

では次の巻の検討に移る。「早蕨」の巻では、「ゆかし」の用語例は一例のみ見当たる。それは次の如くである。

。二月の朔日（きさらぎ　ついたち）ごろとあれば、ほど近くなるままに、花の木どものけしきばむも残りゆかしく、峰の霞のたつを見棄てんことも、おのが常世（とこよ）にてだにあらぬ旅寝にて、いかにはしたなく人笑はれなる事もこそなど、よろづにつつましく、心ひとつに思ひ明かし暮らしたまふ。

この用語例には、「ゆかしく」と形容詞の連用形で表われる。

語義は文脈に沿って考察すると、多様な解釈が考えられる。因に諸書の解釈を見てみると、『源氏物語評釈』や『新潮日本古典集成』には、「気になって」と訳され、『日本古典文学全集』には、「蕾がふくらむのを『けしきばむ』としたのに対して、『残り』は開花するさまをさす。」とあり、この「残りゆかしく」の個所を、「心残りがして」というように心情的な訳が示されているが、『日本古典文学大系』には、「見たく」と感覚面から捉えた訳が示されている。この他、「知りたく」・「待ち遠しく」・「心惹かれ」等の意味に解しても文意は通じる。このように、本用語例中の「ゆかし」は、文脈

Osaka Shoin Women's University Repository

に沿って考えた場合、多様な解釈が可能である。が、これ等はすべて、庭の花の蕾が開花する有様に寄せる好奇心の基盤の上に解釈が成り立つ。この多様な意義のうち、今回ここでは、「ゆかし」本来の意義である「見たく」と捉えておきたい。そして、「引越は二月の初めごろということなので、その日が近づくにつれて、庭の花の木々の蕾がふくらんでくるにつけても、咲き匂う有様が見たく、峰の霞のたつのを見捨てて行くのも……」と、『日本古典文学大系』も示すよう現代語訳しておきたい。中の君は引越する時期が近づくにつれて、庭の木の花に好奇心を寄せている。開花する花の美しさを憧憬し、待ち望む陽性心理が一瞬働くが、その花の美しさも見られず、立ち去らねばならないかと思うと心残りがする陰性心理が働いたり、心が落ち着かない。

さて、このように検討してくると、未知の美しい物を憧憬する気持ちから、「見たい」という欲求が働き、その心裡には不安定心を伴うことがいえる。

以上、本稿においては、「椎本」の巻から「早蕨」の巻までの「ゆかし」の用語例を検討吟味してきた。

（続）